

情報化の考え方と日本語との関わり

東倉洋一（国立情報学研究所）

国語分科会において今後取り組むべき課題の一つである「情報化時代に対応する漢字政策の在り方」の背景となる「情報化の考え方とその日本語との関わり」について、私見をまとめる。

1. 情報化の現状

- ・ e-Japan（インフラ整備）からu-Japan（利用活性化）へ。
- ・ 「いつでも、どこでも、何でも、誰でも」ネットワークにつながるユビキタスネット社会（総務省 u-Japan政策）の構築へ。ブロードバンド（広帯域）とモバイル（移動）へ。
- ・ 携帯端末の契約数は9300万台弱に（2006年6月）、パソコン出荷数は年間1000万台超で世帯普及率は7割超。わが国のインターネット利用人口は約8500万人（2006年1月：パソコン利用は約6600万人、携帯端末利用は約6900万人）。
- ・ ビジネスや生活の情報化。インターネット導入企業は98%超。個人のインターネット利用では、毎日利用が平均で5割強（パソコンでは5割弱、携帯では6割）。
- ・ 教育の情報化はインフラ先行。学校HPの年間平均更新回数は17.8回で、年間300回以上更新の学校がある一方で、全体の約43%において更新回数が7回以下。

2. 情報化の特徴

- ・ 利用形態は、(r) から (r/w) へ。情報を読むことから、読み書きへ（後者をWeb2.0が加速見込み）。ウェブ閲覧、電子メールから電子掲示板、ブログ、SNS、ネットショッピングなどへの利用形態の多様化。
- ・ 情報爆発（洪水、氾濫）が加速。1年間で生み出される情報の総量は全世界で1エクサバイト（ギガの10億倍：ギガ、テラ、ペタ、エクサと1000倍ずつ増加）。今後2年間で目にする情報量は、人類が過去に目にした全情報量より多い。Googleは80億ページを検索。⇒「探したい情報が探せない」「どこかにあるが、どこにあるか分からない」
- ・ 情報の価値化。物が財物の時代から、情報が財物の時代へ。デジタル財の知的財産権の複雑化。

3. 情報化と日本語

【状況】

- ・ ワードプロ、パソコンによる文書作成が普及。かな漢字変換、スペルチェック、文書テンプレートや用例などの機能を利用。
- ・ 携帯メールによるケータイ言語の登場。できるだけ速く（時間節約）できるだけ短く（通信コスト節約）。絵文字による非言語情報の文字化。印刷を前提としない文章作成（携帯だけでなく、チャット、パソコンメールも）。
- ・ ブログの登場。情報生成、コンテンツ創成の簡易化。一億総クリエイター時代。ブログ言語は書き言葉と話し言葉の中間（または、書かれた話し言葉）。
- ・ 全世界のインターネット利用者の言語別人口は、英語36.5%、中国語10.8%、日本語9.7%の順（2002年9月）。
- ・ Webコンテンツの言語比率は、英語68.4%、日本語5.9%に独語の順。
- ・ ブログの記事数では、日本語記事37%、英語31%、中国語19%の順（2006年5月）。

【課題】

- ・ 筆記からパソコン入力へ。手書き機会の減少。
- ・ かな入力によるかな漢字変換機能の利用が普及。漢字を「書く」から「選ぶ」へ。手書きできない漢字も、パソコン利用では書ける（選べる）。
- ・ 漢字を「書く」と「選ぶ」では、使用する脳の機能や活動が異なる。漢字の学習・記憶には視覚とともに手先の運動が関わる。脳の中では、視覚と運動を関連付けて漢字を記憶。⇒漢字の想起でも脳の運動系が活動（脳活動計測）⇒漢字を想起する空書で指先が動く。脳損傷でも指が動く。文字が読めなくなる失語症の純粹失読でも、文字をなぞると回復する場合がある。⇒手書きの学習は有効な文字記憶法。
- ・ かな漢字変換機能の利用が普及⇒漢字を書く脳の機能を使わない⇒機能の退化⇒漢字を忘れる（思い出せない）。
- ・ 書ける（筆記できる）漢字と読める漢字の乖離。
- ・ 日本語の文章は、人にもコンピュータにも、かな漢字混じり文が読みやすい。コンピュータによる日本語解析では、形態素解析（単語などに区切る）が基本。⇒（形態素解析）「もうすぐ」「冬」「が」「始まり」「ます」⇒（構文解析）「もうすぐ」「冬が」「始めます」
- ・ かな系列の日本語解析は、かな漢字混じり文の解析より難しい。
- ・ かな漢字変換の誤変換による漢字の誤記。変漢ミスコンテスト：「貝が胃に棲むことになりました」←「海外に住むことになりました」
- ・ 既存文章のカット・アンド・ペーストによる文章作成。自分の文章でなく他人の文章の借用。⇒故意または無意識の盗用。どれがオリジナルかの管理は自分でも不能に。

4. 情報化とは何か

- ・ 情報通信技術 (ICT) や情報サービスによる生活やビジネスの利便性、効率性の向上。生産性、経済性の向上.....。
- ・ ICTの利用 (ICT人間化) による人の感覚、知識、コミュニケーション、行動などの能力の拡大・向上。
- ・ 距離、場所、時間など時空間の壁を超えた感覚やコミュニケーションの拡大。仮想的に行動を拡大 (分身の術)。
- ・ 情報や知識の地球規模の共有⇒自分や仲間の頭脳から全地球が一つの頭脳へ。人と情報の相互作用による知識の創造。情報検索も、欲しい情報を得ることから、利用者と情報の相互作用・相互刺激による創造へ。
- ・ 情報のデジタル化による真贋区別の不能なコピー情報 (デジタル・クローン) の無限再生。デジタル財の知的財産権、デジタルコンテンツ流通に課題。
- ・ 従来技術の比べたICTの特異性が存在。①情報伝達の手がかりが桁違い (月、日の単位から秒以下に)。②情報伝達の範囲が桁違い (身の回り、地域から地球規模に)。③知的活動に影響 (物理的な関係から生理的・心理的へ)。動き出したら止まらない摩擦のない世界、動きの影響が未知の世界へ。
- ・ 現実社会とネット社会の融合と相互作用。⇒従来には存在しなかった事象が生じる未知の社会へ。
- ・ ICTは光と影の両面を持つ。光として「得るもの」があれば、影として「失うもの」がある。筆記からパソコンへの移行による漢字書字能力の低下は「失うもの」の一つ。ICTや新サービスの商品化・販売・使用に関しては、「何を以て何を失うか」に関するインフォームド・コンセントが必要。
- ・ 「情報」は「薬」と同様に取扱うことが重要。作用と副作用がある。生理的・心理的に全身に働きかける。時には専門家の処方箋が必要。内容に応じた管理 (子供の手の届かぬところに)。十分な試用を経て実用に。
- ・ ICTの光と影をコントロール (光の最大化と影の最小化) し、これをどう使うかが課題であり、これを作り出した私たちの責任と能力に依存。
- ・ ICTがもたらす情報化社会の未来には未知の部分が多い。「どうなるか」でなく「どうするか」が重要であり、私たちの選択に依存。人間が試される未来へ。